とある魔術のネギま!

青松建

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある魔術のネギま！

【Ｎコード】
Ｎ３１７８Ｒ

【作者名】
青松建

【あらすじ】
超の計画を阻止したネギは、いつの間にか別の学園都市へと飛ばされていた。そこでネギは今までとは一線を画した戦いに遭遇する。彼は果たして帰れるのだろうか。
この作品は、ネギまはともかく禁書目録を知らないと読むのが難しいかもしれません。

第1話　再び戦いへ（前書き）

こんにちは！2作目にして初めてクロスSSを書きます。相変わらず乱雑かつ稚拙な文章ですがどうぞよろしくお願いします。

第1話　再び戦いへ

超鈴音が仕掛けた魔法という存在への強制認識魔法の発動を阻止したネギたちは、未来へと帰る超を見送っていた。そして超は未来へと帰った。が、しかし、なんとネギの体も何故か輝きだした。
そして生徒達が驚いているうちにネギは世界から消えてしまった。

―――――――――――――――――――――――――――――

この日学園都市は雨に降られていた。そして学園都市は襲撃者の攻撃によりほぼすべての都市機能が停止し、防衛システムは警備員>>アンチスキル<<や風紀委員>>ジャッジメント<<の八割が昏倒したため崩壊していた。

そしてそんな状況で上条当麻は自分を殺すためにやって来たという、十字教最大派閥ローマ正教の禁断の組織『神の右席』の一人である前方のヴェントと対峙していた。
その時二人の間の空間が輝いた。そしてそこから赤毛の少年が現れた。

「・・・。子供？なんでここに？」

上条は緊迫した雰囲気の中思わず気を緩めてしまったが、そういう訳にもいかない。驚いていたヴェントはすぐに態勢を戻して少年に向かって攻撃しようとしている。

「こどもねぇ・・・。まあ、子供がいたとしても私のやることは変わらない。このガキがどうしてここにいるのかも気になるがまあい

いや。という訳でさっさと煉獄に行きな、上条当麻！！」

そして彼女はハンマーを振り回した。そしてそれによって生じた風の球が二人に襲い掛かる。それを止めようと上条は少年の前へ行こうとしたが・・・、

「『風楯』！」

そう少年が言うと、ヴェントの攻撃が掻き消えた。これにはさすがのヴェントの驚きを隠さなかった。

「なんだと！？今のは風の魔術！？だが十字教の魔術とは違う、いや、そもそもこれは私の知っている魔術とは完全に異なっている・・・。魔力を感じたし超能力ではないな」

「なんだよ今の！こいつはいったい・・・？」

第1話　再び戦いへ（後書き）

どうでしたか？やはりクロスオーバーは難しい・・・。ですが完結目指して頑張ります！応援とご感想お待ちしています！

第２話　ちがうせかい

９月３０日、この日学園都市は、ローマ正教禁断の組織『神の右席』の一人前方のヴェントによる謎の攻撃により崩壊しかけていた。そんな前方のヴェントの目的は幻想殺し＞＞イマジンブレイカー＜＜を持つ高校生上条当麻の抹殺だった。

上条とヴェントはあるレストランの中で対峙していた。そしてヴェントが上条への牽制のためにレストランの中にいる客たちを殺そうとしてハンマーを振り回そうとしたとき、二人の間の空間が光った。そしてそこには赤毛の少年―ネギ・スプリングフィールド―がいた。

――――――――――――――――――――――

――

ヴェントは驚いていた。突然、少年が現れたのもそうだが、彼が自分の攻撃を止めたこと。いや、自分の見たことのない術式の魔術と思われるものを使用したからである。

「なんなんだこのクソガキは！！いったいそれは！？んっ、ごば！？」

彼女は突如として血の塊を吐きだした。彼女はふらつき始めるとともに、彼女の顔から余裕が消えた。それを見た上条は戸惑いながらもこぶしを握って攻撃しようとすると、彼女は店の壁を壊して飛び去って行った。いきなりヴェントの様子がおかしくなったことを疑問に思った上条だったが、さらに厄介な面倒事を抱えることとなった。

「なんで子供がこんなところにいるんだ！？しかもいきなり現れて、いったい誰だ？それにヴェントの攻撃を防いだし。とりあえずここを出よう。話はそれからだ、来い！」

そして上条とネギは外に出た。そして上条はネギがこことは違う学園都市で教師をやっていたこと、そこで学園祭をやっていたらなぜかいきなりここに居た事を聞いた。上条もネギにここは麻帆良という地名ではないこと、また、先ほどの前方のヴェントの攻撃や謎の黒ずくめの集団の出没によりこの街の状態が非常に危ないことを話した。

「・・・麻帆良なんて地名聞いたことないな。この国に学園都市は一つしかないはずだし、ネギの言ってることが正しいとするとそんな規模の事をやっているのに知らないわけがない。それにしても子供が先生って・・・。その学校おかしいんじゃないか？それとお前、なんでヴェントの攻撃を防げたんだ？」

「・・・？あれは『風楯』の魔法ですよ。知らないんですか？さっきの人も魔法使いでしたから、あなたもそうかと・・・。あれ？さっきの僕の知ってるのと少し違うような・・・。」

「魔法使いだと？お前、魔術師か超能力者じゃないのか？」

「魔術師も魔法使いも同じじゃないんですか？それにここには超能力者もいるんですか？ここはいったい？ンっ！？」

「おい！どうした！！」

突然ネギは倒れてしまった・・・。

―――――――――――――――――――――――――――――

学園都市のあるビルの中は警報で赤く染まっていた。そんな中、生命維持装置の液体の中で逆さに浮かんでいる学園都市総括理事長アレイスター＝クロウリーはあるモニターに釘付けになっていた。そして彼は笑い出した。

「っくくく！なんだこれは！先ほどの魔術・・・、私の知っているあらゆる魔術に該当しない。当然、超能力でもない！それにこのネギ・スプリングフィールドといったか、この少年学園都市の人間ではない。そしてこの空間の歪み！では彼は異世界人か！？ふふふ。これだから人生は楽しい。まあいい。まずは侵入者の排除を優先しよう。」

―――――――――――――――――――――――――――――――――

上条は打ち止めを探しがてらに、倒れたネギをかかりつけの病院へと運んだ。そして上条がヴェントを倒すと目を覚ました。そういたら横には上条とカエル顔の医者、そして豪奢な白い修道服を着た

銀髪の少女がいた。ネギが起きたのを確認したカエル顔の医者―冥土帰し＞＞ヘヴンキャンセラー＜＜―がネギに話し出した。

「まず君の体だが特に問題はない。このまま退院してくれても結構だ、・・・体だけ見ればだが。君は麻帆良という名の学園都市から来たそうだね。だけどそんな土地はこの星には存在しない」

「そんな！じゃあ僕はいったいどうなるんですか！？僕の生徒たちは！？」

「君が嘘を言っている可能性もあるが、君の言っていることを信じるとするのならば、君はここことは違う星もしくは異世界から来たということになる。まあ君は異世界人だろうな。まあ気を落とすな、ここもいいところだぞ？」

冥土帰しはそう言ってネギを励ました。冥土帰しはネギがまだ１０歳くらいの子供なので泣き出すかと思ったが、ネギは泣かなかった。

「帰れる方法はあるんですか？」

「わからない。でも、ここの技術ならば可能性はゼロじゃない。期待してくれてもいいと思う。ただやはり、可能性はかなり低い。君のような子供には酷だと思うが・・・」

「・・・わかりました。可能性があるならあきらめません。それに落ち込んでいてもしょうがないですから。でもこれからどうしよう・・・。」

「ならうちに来いよ。どうせインデックスもいるし一人位増えても問題ねぇしな。で、こいつがインデックスだ」

そう言って横にいる少女をネギに紹介した。

「いいんですか？」

「全然いいぜ！気にすんな！」
「日中は当麻もいないし、話し相手がいると嬉しいかも」

上条もインデックスも歓迎してくれているようなのでネギはその言葉に甘えることにした。
そしてその日にネギは退院し、上条たちとともに彼の部屋へと帰って行った。

この出会いはこの世界に何をもたらすのか、それは誰も知らない・・・。

第2話　ちがうせかい（後書き）

いろいろ飛ばしました。相変わらず訳の分からん文章ですが、感想などを頂ければ励みになります。

第3話　開戦へ

バチカン市国聖ピエトロ広場にて

現在のバチカンは夜であり薄暗い。その中、楕円形の広場の中心からやや外れた場所にある噴水の縁に腰掛け、だれの目から見ても不味そうに酒を飲んでいる中年位の礼服を着た男がいた。彼の名は左方のテッラ、『神の右席』の一人である。

「また飲んでいるのか、テッラ」

低い男の声が聞こえた。テッラの下へ二人の男がやって来た。一人はテッラに声をかけた同僚の後方のアックア、もう一人は豪奢な礼服を纏ったローマ正教のトップであるローマ教皇である。酒を飲んでいるのを咎められた気がしたテッラは彼らに向かって言った。

「これでも一応補充しているんですがねー。『神の血』ってヤツを」

「パンに葡萄酒か。ミサの仕組みだな」

「私の『神の薬>>ラファエル<<』は土を示しますから、力を補充するためには、大地の『実り』や『恵み』を利用するのが手っ取り早いのですよ」

テッラの足元を見るとそこには、中身のなくなったワインのボトルが落ちていた。そのラベルを見たアックアは、

「安酒だな。こんなものは観光客向けのぼったくり店でもお目にかかれないであろう。『神の右席』の名を使えば、もう少しマシな銘柄を集められたはずである」

「よしてくださいよ。酒の味などわかりません。ただの儀式に使ってる道具ですからねー、贅沢なことを言っては本当の酒飲みに失礼です」

「・・・信徒の代表者としては、派手な飲酒は控えていただきたいところだがな」

酒の話をしていたので、教皇が咎めた。ところが、テッラは笑いながら、

「おっと、私が責められるのは心外です。私の場合は儀式として必要に迫られているだけですが、アックアの方はそうでもないのに酒の味や銘柄に詳しいようですがねー？」

教皇に睨まれたアックアは、身を引いて、

「傭兵崩れの嗜みだ。戦場ではそういう物も必要でな」

「ハハッ、アックアはごろつきですからねー。我々、敬虔な信徒と違って悪い子なんですよ」

「・・・それにしても、それにしても私まで屋外に集めるとは何の用だ？」

「ええ、先日、学園都市に現れたイレギュラーについてですよ。報告では、ヴェントの攻撃を防いだとか。たかだか十歳くらいの子供

が『神の右席』の攻撃を防げると思いますかねー？」

「思わんな。だがしかし、その子供はすぐ、ヴェントの『天罰術式』で倒れたのだろう、問題ないのであるか？」

「小さなミスが崩壊につながるんですよ。さて、準備も終わりましたし、そろそろ私も行くとしましょうかねー。そうだ、最後に」

テッラは、アックアと教皇に紙を見せた。

「この呪文と思われる羅列に見覚えはありますかねー？ラテン語や古典ギリシア語で書かれていますが」

「・・・見覚えがないな。内容を見ると十字教系の術式ではなく、古代ギリシア系やローマ神話のようだが」

「私もないのである。古代ギリシアと言えば、ヴェントが学園都市を落とそうとして使おうとした術式は、ピュタゴラス教団のものであったようであるが」

「はてさて、どのようなものだか？ここで使う訳にもいきませんからねー。いやー、いろいろ試すものが増えまして大変ですよ。」

「ところでアレも使うのか」

「当然です。民間人を使う事が不服ですかねー、アックア」

「・・・殺し合いなら、それで糊口を凌ぐ兵隊に任せれば良いであろう」

「ハハッ、貴族様らしい意見です。まあ、もしかしたら使わなくて済むかもしれませんがねー。これによっては」

そういって、紙片を振った。

「我ら『神の右席』は不完全なれど、その神秘性を以って民を導くもの。ならばおびえる仔羊たちには勝手に導かれてもらいましょうよ。この羊飼いである私の手によって、・・・笛に合わせて消えて行った子供達のように」

そう言って左方のテッラは広場を去った。そしてそこには、後方のアックアとローマ教皇の二人が残された。そして二人は共通の疑問を持った。テッラの持って行った紙に書かれた、呪文の事である。

第3話　開戦へ（後書き）

久しぶりの更新です。どうでしたか？かなり短いですが、きりがいいので。ぜひ感想を頂けると嬉しいです！

第4話　アヴィニョンへ・・・

退院したネギは、上条とインデックスとともに上条の部屋まで向かっていた。ネギは、物珍しそうに辺りを見回している。

「それにしてもすごいですね、この街。見たことない物だらけだ、すごーい！」

「それはよかったな、俺から見ればこれが当たり前なんだけどな」

「そんなことないかも」

「というかネギ、おまえ本当に教師なのか？十歳で先生になれるとか、生徒になめられるんじゃねーの」

「そ、そんなことないですよ」

上条はもう一言言おうとしたが、自分の担任を思い出してやめた。実年齢は違うが彼の担任は下手したら、ネギよりも下の年齢に見えるかもしれない。そうしているうちに、上条の住んでいるマンションが見えてきた。

「・・・意外と普通ですね。これなら、麻帆良の寮の方が立派なような・・・」

ネギが残念そうにそう言った。すると上条が、

「う、うるさい！仕方ないだろう、うちの学校はランクが低いんだから。でも、常盤台の寮も案外普通だったよな」

「しかも中はワンルームなんだよー」

「えっ、大丈夫なんですか？」

実はまったく大丈夫じゃない。インデックスが来たせいで上条はベッドから追い出され、風呂の浴槽で寝ているのだ。上条はついとっさに、ネギを引き取ると言ったが、学園都市での身元のない彼を引き取るのはまずいと思った。が、インデックスの時もどうにかなったの大丈夫だろうとも思った。そして、部屋の前に着くと、隣人で級友の土御門元春が立っていた。

「おーっす、カミやん、禁書目録と、・・・そこのぼうずも一緒か。ほらよっと」

土御門は上条に何かを投げた。上条が取るとそれは、ネギの学園都市での身分を示すＩＣカードだった。上条はやっぱり、と思った。

「さて、ネギ・スプリングフィールド。いきなりで悪いが、お前の使えるその力を見せてほしい」

「ちょっと待て！ここじゃ危ないんじゃないか」

「だいじょうぶです。一番簡単なのでいいですか？ところであなたは？なんで僕の事を・・・」

「かまわんよ。俺の名は土御門元春、よろしくな。なんでお前の事を知っているのかは聞くな」

「わかりました。では、プラクテ・ビギ・ナル、『火よ、灯れ>>アールデスカット<<』」

ネギが胸元から取り出した小さなステッキの先端に火が灯った。それを見て、

「アールデスカット・・・、ラテン語で『火よ、灯れ』か。言霊のようなものか？」

「いままで見たことのない術式・・・。私の頭の中の原典のどれにも該当しないんだよ。しいて言うなら、古代ギリシア系かも」

「？？？」

「ヘブライ系のはないのか？」

「ありますが、ここで使うには威力が高すぎますし、第一、僕には使えません」

「そうか、もういい。ありがとな、じゃあな」

「おう」

土御門は上条の横の部屋に戻って行った。そして上条たちも部屋に帰った。その後は、各々の自己紹介をしたり、ゲームをしたりし

た。ちなみにネギが浴槽で寝ることになり、上条は台所で寝ることになった。次の日、上条が学校へ行った後、

「ねーねー、ネギ、ゲームしよ」

「いいですよ。それにしても、インデックスさんってすごいですよね。十万三千冊の魔道書全て覚えてるんでしょ」

「大したことないんだよ。ねー、スフィンクス」

「いやいや、さて、やりましょうか」

簡単な格闘ゲームだったが学園都市製のもので、ネギはやり方が分からずインデックスに連敗し続けたが、やり方を覚え始めると、とうとう勝ってしまった。

「うわー！まけちゃったんだよ、悔しい～！」

「やった！やっと勝った！」

「もう一回やるんだよ！」

そう言って、二人はもう一回ゲームをやった。インデックスは負けたのにもかかわらずうれしかった。日中、上条は学校に行っていない上、彼以外の数少ない友達である風斬氷華は、事情によりめったに外へは出て来られない。そのため、昼間はたまに学校を抜け出

してやってくる土御門の妹である舞夏と話をしているか、テレビを見ているか、スフィンクスとじゃれてるかぐらいしかやることがなかった。だからこそ、遊び相手ができて嬉しかったのだ。世界が違うとはいえ、同じ英国人だし。

そして、ゲームが再び終わると、インターホンが鳴った。

「誰だろ？ネギ出て」

「はいはい。あっ、土御門さん！」

〜そうだ、ネギか？〜

「はい、そうですが・・・」

〜用がある。外へ出てこい〜

そういわれたのでネギは玄関を開けると、いきなりハンカチを鼻にあてられ、倒れてしまった。

「悪いが少し借りるぜ、心配はいらないから安心しろ」

「ちょっと！！」

土御門は去って行った。そう言われたので、インデックスは待つことにした。

「やっと起きたか」

「ここは！？おえごごごごご！？」

「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ！！」

上条が何か言っているが意味が分からない。さっきから非常に重力がかかっているようなので、ネギは衝撃を和らげる魔法を使った。

「ほう、そんなことまでできるのか、魔法というやつは。まあ、魔術でもできるか」

「ここは何処なんですか？土御門さんにいきなり倒されて・・・。インデックスさんは？」

「悪く思うな、こうでもしないと着いて来てくれなさそうだからな。禁書目録は大丈夫だ、俺の妹が相手をしてくれるだろう。ここは超音速ジェット機の中だ、時速七千ｋｍくらいでるぜ」

「へー、すごいな。こういうのを待ってたんですよ。麻帆良でもこんなのはないだろうな。ところで、当麻さんは大丈夫なんでしょうか？」

「ごごごごごごごごご！」

上条の目は半分飛んでいる。ちっとも大丈夫そうじゃない。

「そいじゃ、今回の目的の話をするぜい。カミやんにはもう話したが、もう一度言うぜい。これからアヴィニョンにあるC文書てのを止めに行くんだにゃー」

「アヴィニョン・・・、ああ、フランスの。ローマ教皇がアナーニ事件以降捕囚された場所ですよね？」

「これくらいは世界史で習うが・・・、欧米人とはいえ十歳で知ってるやつは少ないと思うんだが。さすがだにゃー」

「ええ、まあ。ところでC文書というのは？」

「C文書・・・、正式名称は、Ｄｏｃｕｍｅｎｔ　ｏｆ　Ｃｏｎｓｔａｎｔｉｎｅ。コンスタンティヌス帝がローマ正教のために記した文書で、十字教の最大の指導者はローマ教皇であることと、当時のローマ帝国領の土地権利等を全てローマ教皇にくれてやるちゅう、胡散臭いもんだにゃー」

「それで、それがいったい何だと言うんですか？」

「この霊装の効果はローマ教皇の発言全てが正しいものになる、というものだにゃー。実際、ローマ正教徒だけが対象だが、その人数は二十億人で世界人口の三分の一にあたるんだぜい」

「それだけの人達が教皇とはいえ、ただ一人の人物の言うことを聞いてしまうと言うんですか！？そんなことができるなんて・・・」

「この霊装は一度使うと取り消すのが難しいから今まで使われなかった。逆に言うと、そんなものも使わなければならないほどローマ正教は追いつめられているということだ。それに、扱うのも難しい

し、本来ならばバチカンでしか使用することはできないのだが、それはさっきお前が言った通りだ。教皇はアヴィニョンに居た事がある。だから例外になるんだにゃー。で、目標はこのC文書を破壊すること。協力してくれるかにゃー？」

「・・・わかりました！ローマ正教徒とはいえ関係のない人たちが巻き込まれているのなら」

「そうだ。このC文書が原因で世界中でデモが起きていて、怪我人も出ている。さて、着いたようだ。いくぜい！」

「どこへ？」

気分の悪そうな上条が言った。だが行くと言っているので従うしかない。着いていくと、轟々と音のする場所に着いた。土御門は二人にリュックサックのようなものを押し付けてきた。その後、唐突に機体の壁が大きく開いた。そこには青空が広がっていた。機内には突風が吹き荒れ、上条は吹き飛ばされそうになる。

「つっ、つつつつつ土御門ォーッ！？」

「ここから降りるんですか！？ってことはこれはパラシュート！？なんで！？」

「この飛行機はロンドン行きだにゃー。バカ正直にフランスの空港で降りたら、ローマ正教のクソ野郎どもにばれちゃうにゃー」

「まあ、障壁を張ってるし大丈夫か。じゃあ行きましょう！」

「ノリがいいねぇ。カミやんも見習え！」

そう言って土御門は壁の取っ手につかまって怖がっている上条を蹴っ飛ばした。荒れ狂う突風が彼を外へ導いた。続いて土御門も落ちて行った。

（元の世界に戻りたいけど、困っている人がいるなら助けるのがマギステル・マギの仕事。僕のできることがあるならやらないと、当麻さんたちも困ってるみたいだし。戻るのは遅くなりそうだけど、待っててくださいね、クラスメートのみんな・・・）

そんなことを思いながらネギも、広大に広がる大空へと落ちて行った。

第４話　アヴィニョンへ・・・（後書き）

どうでしたか。本当にクロスオーバーっていうのは難しいですね。いままで書いてきた皆さんはすごいです！では、感想お待ちしています！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3178r/

とある魔術のネギま!

2011年3月20日14時16分発行